

コンサート気分で味わう名曲・名演奏 **第2回**

プログラム

今日は前半に序曲と協奏曲、後半に交響曲とアンコール曲を加えた実際のコンサートプログラム構成で、コンサート気分を味わっていただく企画の第2回目をお送りします。

コンサートは**ウェーバー**の歌劇「**魔弾の射手**」序曲で始まります。この歌劇は、やがてワーグナーに続くドイツロマン主義歌劇の道を切り開いた記念碑的作品ですが、序曲は特に有名で、実際のコンサートでもたびたび取り上げられる名曲です。巨匠**カール・ベーム** (1894~1981) がウィーン・フィルを指揮したザルツブルク音楽祭での演奏はベームならではのじっくりと歌い込んだスケールの大きな演奏です。**シベリウス**の**ヴァイオリン協奏曲**は、唯一の協奏曲ですが、ヴァイオリニストを志した作曲者らしく、華やかな演奏効果と高度な演奏技法を駆使した古今のヴァイオリン協奏曲の中でも屈指の傑作です。ソリストの**ジャニーヌ・ヤンセン** (1978~) は現代最高のヴァイオリニストのひとりで、オランダのユトレヒト州、スツト生まれ。6歳からヴァイオリンを始め、14歳でデビュー。以来世界の名門オーケストラ、一流指揮者と共演を重ね、日本にも度々来日しています。名指揮者**マリス・ヤンソンス** (1943~2019) 指揮コンセルトヘボウ管との共演では、情感たっぷりの歌心と切れの良い気迫溢れる演奏に魅了されます。休憩を挟んで、後半は**チャイコフスキー**の**交響曲第4番**。彼の交響曲の中では最も変化に富んだ情熱的な名曲です。**カール・ベーム**のチャイコフスキー?と聞いてピンとこない方も多いかも知れませんが、ベームに興味のある方なら1977年から80年にかけてロンドン響と第4番~第6番の後期三大交響曲をグラモフォンに録音していることはご存じだと思います。実はベームのロシア・スラヴ系のレパートリーには、このチャイコフスキーの交響曲第4番とストラヴィンスキーの「火の鳥」、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」が入っていたと言われています。しかも今回のオーケストラはチェコ・フィル。緊張感みなぎる燃焼度の高い指揮ぶりに必死で食らいついて行くチェコ・フィル。実にスリリングな名演です。アンコール曲は**ベルリオース**の**ハンガリー行進曲**です。劇的物語「ファウストの劫罰」の中で最も有名なアンコールの定番曲ですが、今日は**ヤン・クレンツ** (1924~2019) 指揮によるドラマティックな名演でお聴きください。(中川)

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826): **歌劇“魔弾の射手”序曲**

カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1978.8.6 ザルツブルク祝祭大劇場でのLive)

ジャン・シベリウス (1865~1957): **ヴァイオリン協奏曲ニ短調Op..47**

ジャニーヌ・ヤンセン(ヴァイオリン)
マリス・ヤンソンス指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団
(2010.1.31 アムステルダム・コンセルトヘボウでのLive)

*** 休憩 ***

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893): **交響曲第4番ハ短調Op..36**

カール・ベーム指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団
(1971.8.8 ザルツブルク祝祭大劇場でのLive)

エクトル・ベルリオース (1803~1869): **ハンガリー行進曲 (劇的物語“ファウストのごう罰”Op..24から)**

ヤン・クレンツ指揮ベルリン交響楽団
(1997.2.6 ベルリン・コンツェルトハウスでのLive)

曲目解説

ウェーバー：楽劇「魔弾の射手」序曲

ドイツ・ロマン派の初期を代表する作曲家、ウェーバーは、1786年11月18日、ドイツ北西地方オルデンプルクに生まれました。ウェーバー家の父は男爵の爵位を持った貴族の家柄で、モーツァルトの父のように息子たちを神童に仕上げることを夢みていた父は、その望みをカルル・マリアに託しました。9歳の時に有能なオルガン奏者フォイシケルから音楽のレッスンを受け、隠された才能が開花、その後ザルツブルク、ミュンヘンで学び、さらにウィーンでは高名なゲオルク・ヨーゼフ・フォークラーに師事して、13歳でオペラの処女作を作曲しました。天才につきものの理想主義、若さゆえ不安定な生活を強いられていたウェーバーは、ようやく1813年プラハ歌劇場の指揮者となり、1817年にはドレスデン歌劇場の指揮者に迎えられました。着想したまま中断していた歌劇「魔弾の射手」は1820年に完成、1821年6月18日、ベルリンで初演されました。「悪魔サミエルに魂を売った者は魔法の弾丸を与えられるが、さらに新しい犠牲者を悪魔に捧げると、そのたびに生命を長らえられ、射撃も一段と上達する」という伝説を筋として魂の動揺と勝利が描かれます。序曲は単独でもよく演奏される名曲です。

シベリウス：ヴァイオリン協奏曲ニ短調作品47

フィンランドが生んだ大作曲家シベリウスは、外科医だった父を2歳の時に亡くし、最初ヴァイオリンニストを志し、ヴァイオリンを習い始めます。しかし人前であがりやすい性格を知り、演奏家の道を諦め、作曲への興味を募らせて行つたと言われます。ドイツ・ロマン派、ロシア国民楽派の影響を受けながらも、次第に独自の作風を築き上げて行きました。青年時代に高まっていた祖国愛を激しく燃やしていたシベリウスは民族的と呼ばれますが、古くからの民謡を取り入れるのはその方法の一つとして知られています。しかしシベリウスの場合は生の素材をそのまま使うのではなく、祖国の精神を発想のひとつとして旋律やオーケストレーションを引き出して行つたのです。その後作風は、ロマン的色彩から次第に内省化して行き、独自の境地を切り開いて行きます。**ヴァイオリン協奏曲ニ短調**は1902年9月、愛妻アイノに宛てた手紙で、第1楽章冒頭の楽想が出来たことを知らせていますが、全曲は1903年の夏に完成、初演は1904年2月8日にヘルシンキにてヴィクトル・ノヴァーチェクのヴァイオリンとシベリウスの指揮で行なわれました。作品は賞賛を持って迎えられましたが、シベリウスはまだ不満を持ち、1905年6月に改訂版を出版しました。ヴァイオリンの性能を駆使した華やかな演奏効果と詩的情緒にあふれた傑作です。
第1楽章 アレグロ・モデラート **第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ**
第2楽章 アダージョ・デイ・モルト

チャイコフスキー：交響曲第4番へ短調作品36

ロシアが生んだ最も偉大な作曲家チャイコフスキーは、7曲の交響曲、バレエ音楽、管弦楽曲、協奏曲、ピアノ小品や歌曲、歌劇まで優れた作品を多数残しました。ペテルブルク音楽院で高名なアントン・ルビンシュテインに師事し、第1、第2交響曲やピアノ協奏曲第1番等、初期の主要作品を書き上げていた37歳の頃、音楽院の弟子であったミリュコヴァという女性から熱烈な求婚を受け、勢いに押されて結婚してしまいます。しかし彼の仕事には理解がなく、内気な性格だったチャイコフスキーの結婚生活は破たん、強度のノイローゼから入水自殺未遂まで起こし、結婚を解消します。その頃1876年に鉄道経営者の未亡人、フォン・メック夫人から手紙をもらいますが、彼の高い音楽的才能に敬意を表した内容で、年額6000ルーブルの経済的援助へと発展、それは13年続きますが、しかしふたりは生涯会うことはありませんでした。作曲に専念できるようになったチャイコフスキーが、フォン・メック夫人に献呈する目的で作曲した最初の大作が**交響曲第4番へ短調**です。曲は1878年1月滞在先のイタリアのサン・レモで完成、翌2月10日ペテルブルクにてニコライ・ルビンシュテインの指揮で初演されました。情熱的で強い生命力を持った中期の傑作です。
第1楽章 アンダンテ・ソステヌート・モデラート・コン・アニマ **第3楽章 アレグロ**
第2楽章 アンダンティノ・イン・モード・デイ・カンツォーナ **第4楽章 アレグロ・コン・フォコ**

ベルリオーズ：ハンガリー行進曲(劇的物語「ファウストのごう罰」作品24から)

フランスの大家ベルリオーズは23歳の学生の時ゲーテの「ファウスト」を一読して感動し、翌年に「ファウストからの8つの場面」というカンタータを書き上げました。それから17年後の1845年、ハンガリー旅行を機に再び自ら手を加えながら、1846年に前作の「8つの場面」を組み入れたコンサート用オペラ「ファウストのごう罰」を完成させました。1846年12月に自身の指揮で初演されますが、芳しくなく、この作品の真価が認められるようになったのはベルリオーズの死後の事で、1877年名指揮者エドゥアール・コロンヌによる演奏が絶賛されてからだと言われています。今日では数々の名曲ナンバーを持つ傑作として知られています。**ハンガリー行進曲**は第1幕でハンガリー兵の行進曲として演奏される名曲で、元はベルリオーズがハンガリーに演奏旅行した際に耳にした伝統的な民謡を管弦楽に編曲したものです。ラコツツイ行進曲とも呼ばれますが、これはハンガリーの大貴族ラコツツイ・フェレンツ2世の名を冠しています。